

庄内協同ファームだより

No.143 2013年1月号



発行/

〒999-7631 山形県鶴岡市八色木字西野338

tel.0235-78-2120 fax.0235-78-2140

http://www.shonaifarm.com



羽黒山の大鳥居

農業の世界に飛び込んで10年。
庄内協同ファームでお餅を作り続けて、昨年の秋より新理事となりました。宜しく願います。

この10年の歩みは失敗と、ちよつとの成功の連続でした。農業の世界は何もかも初めてで、最初の頃は、朝は起きられず体はガタガタ。それでも、分らないことは聞いて、農作業日記をつけたり、田んぼの地図をかって場所を覚えたり自分なりに工夫して何度も何度も仕事を繰り返していくうちに、農業が自分の体の中に染み込んでいきました。仕事の力加減がわかってくると、辛いと感じた仕事も少しずつ面白がついてきました。知識より「まず行動！」で突っ走ってきたので、まだまだ頼りない部分はありますが、自

分なりの経験値は10年分貯まっていると思っています。

先輩農家のお父さんが「百姓は一年一年が勝負！米作りは一年で一回しか作れない。俺の人生の中で30回は作ったけど、あと何回挑戦できるかわからないから、毎年大博打だよ」という話を聞きました。更に「手塩にかけて育てても大雨や台風でやられたりもするし、本当に大成功の年なんて、一生のうちに何回も無いよな。ガハハハ！」

普通の職業から見たら、とんでもない世界です。昨年の自然災害だけでも春の爆弾低気圧によるビニールハウスの倒壊に始まり、夏の日照り続きの後の秋の長雨。天候に左右されっぱなしで思うようにいかない事ばかり。技術や経験もあるベテラン農家でさえ、毎年違う気象条件の中で同じような米づくりをする難しさがあり、失敗する時もある。そんな徒労とも思えるような農作業を休むことなく続けてきたひたむきさ。笑って辛い話ができるその人を、僕はその時カッコイイなと思いました。

35歳の自分が、ここからあと30回米作りと餅つきができるだろうか？未来は誰にもわからないけれど、自分が目指したい未来を決めて進んでいくことはできるはず。

今の僕は農家として、食べてくれる人に喜んでもらえるお米やお餅を作る事や、一緒にお餅を作る仲間たちと頑張る時間が純粋にもっと楽しく。

お米やお餅を通して、働く人や食べてくれる人、いろいろな人との縦や横の繋がりの中で、僕は誰かの為に頑張って働きたい。その中でぶち当たるだろう壁も面白い方向に変えていきたい。

作る僕たちと、食べる皆さんと一緒に面白く未来を作る。そんな一年になりますように今年もどうぞよろしく願います！

理事 高橋 直之

新年のごあいさつ



代表理事
小野寺 喜作

新年あけましておめでとうございます。

旧年中は大変お世話になり、ありがとうございました。本年もよろしくお願い申し上げます。

農の自立をめざして、自分たちの作った農産物や農産加工品の産直活動がひろがり、農事組合法人として1989年2月に設立

をしてから24年、前身の農民レポート発足から39年を迎えました。

これまで私たちが作った農産物(お米・庄内柿・だだちゃ豆・茶豆等)、農産加工品(おもち・漬物・おこし・あられ・干柿等)を多くの方々に食べていただいたおかげで今に続いております。「まちとむらを結ぶ」産直活動の中で、食に対する安全性、農薬の危険性、環境問題等多くのことを学ばせてもらう中、減農薬栽培から無農薬栽培へ、さらには無農薬・無化学肥料栽培そして2000年からは有機JAS認証に取り組み、有機栽培を徐々に増やし作付け全体の40%を超える割合までなってきました。また、もちの加工場も有機認証を取得し、有機の白もち、有機の玄米もち等加工しております。

庄内農民レポートから25名の組合員で農の自立を目指してスタートし、昨年8月の総会では3名の若手後継者が新組合員として加入し41名となりました。役員の改選では、若い組合員の英知を出してもらい時代の波を乗り切ろうということから、3名の若手理事が選出され新体制で活動しております。

昨年は、異常気象のなかでしたが、全般的に収穫量・品質ともに一昨年よりは良い状況でほっとしております。

す。今年も尚一層より良い生産に励む所存です。

さて、東日本大震災による未曾有の被害からの復興はいまだに大きな進展は見られません。原発事故以降の放射能汚染の心配もいまだに続いております。

昨年の夏には、福島から親子連れの皆さんが地元日本海庄内浜での海水浴に来られ、夜に交流会をしました。放射能の影響で、わが子を外で安心して遊ばせられない環境にあり、様々な不安があることをお聞きしました。そんな中で、今回は久しぶりにおもいきり遊べたと喜んでくれました。一日もはやく復興できることを願い、私達も支援を続けたいと思っています。1月下旬には、福島で餅つき交流を予定しております。

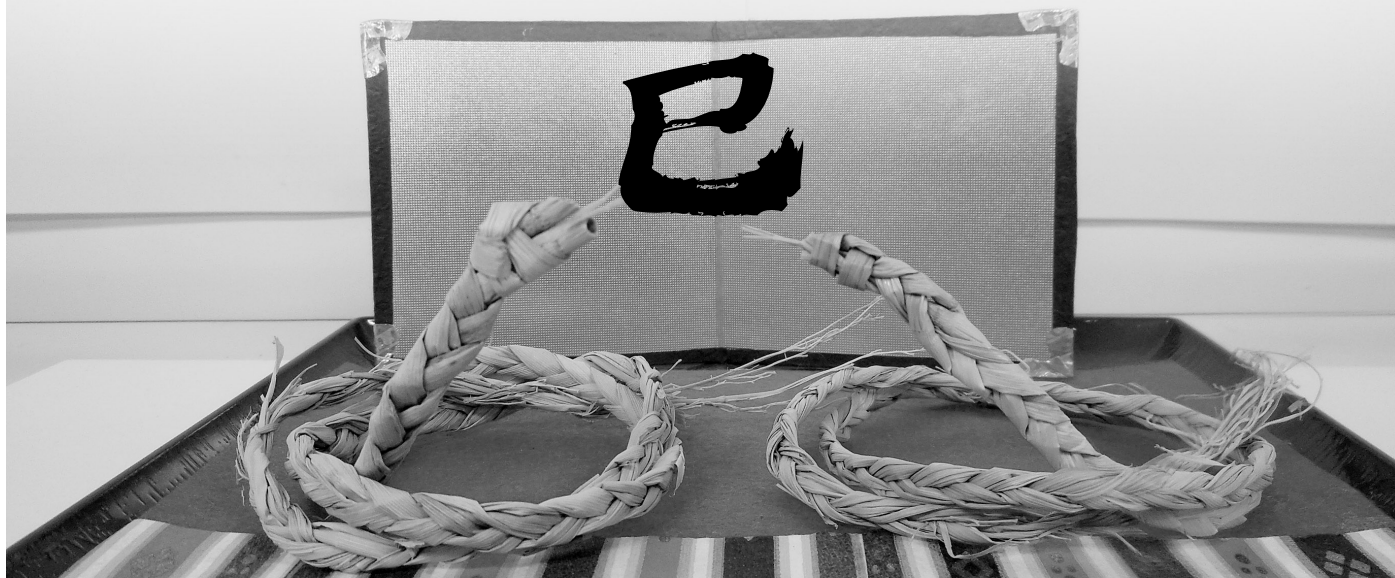
この度の大震災は、様々なことを考えさせられました。今のままの暮らし方でいいのか、自然環境の中で生きていくには、一番大切なものは何かという事…。

今一度、まちとむらを結び、お互い顔の見える関係を大切にし、真の豊かさ、大切なものを再認識しながら私たちの役割を果たしたいと思います。

皆様方にとって良き年となりますようお祈り申し上げます。



ボランティア先でのわら細工風景



赤かぶ漬け

8月、9月と雨が降らない。しかも30度を超す酷暑の中、収穫の終わったただちや豆の畑に赤かぶを播種するために肥料をまいて準備をした。赤かぶの種は小さく1mmの半分くらいだが、それを均等に播種するのは難しい作業だ。あまりに畑が乾燥しているためにスミサンスイという散水装置を組み立てて散水作業を数回繰り返し続けた。8月の末には蒔き終えないといけない。1週間ぐらいで小さい双葉が見えるようになるが、その時には雑草も一緒に大きくなっていく。9月中旬にはただちや豆の収穫も終わり稲刈りの準備をする。9月末には稲刈りが始まり10月中旬には米の稲刈り、出荷も始まる。その頃にはもう冷たい朝夕の風が吹いている。



10月の末頃から11月、12月までに赤かぶの収穫をする。雪が降る12月の10日頃までの間に赤かぶの収穫を済ませないと雪の下になって収穫できないことになってしまう。へたと葉を切り取って赤かぶを収穫し、加工所に取り込んで洗浄機で洗い、へたをカットした後漬け込みをする。最初は塩漬けで3日くらいすると水が赤かぶの上までかぶり、その後、砂糖と酢を入れる。漬け込んだ赤かぶのおよそ60%が製品になり、100kgなら60kgが製品で、あとは水となつてかぶから出てくる。砂糖と酢は水に溶けて赤かぶに浸透して、漬け込んでから3週間くらいでカブはきれいな赤に染まる。

とめどなく農作業は続き、時間も過ぎ去るのみ。季節の移りも、今は白い雪に包まれている。

生産者…佐藤清夫・喜美



青年農業者交流会に参加して

五十嵐 勇輝

先日、取引先の青年農業者交流会が福島県で行われた。全国から青年農業者たちが集まり、震災後の福島に今後の農業を学んだ。

まず一日目は被災地で農業を営む「福島県有機農業ネットワーク」の方々に震災後も放射線物質とたたかいながら、地域で有機農業を実践する精神と技術、そしてその想いと希望を聞かせていただいた。「有機農業は自然が本来持つ生きる強さの結晶であり、これと正反対の原子力の脅威にさらされている今こそ、有機農業の強さを見出し、育て、そしてそれを中心として福島県の復興を実現していきたい。」という言葉に決意と希望を感じた。

そして二日目は、復興に力を注ぐ現地の方にガイドをしていただき、いわき市の久之浜地区を訪れた。原発から30km圏内の海沿いにあるため、津波の被害に加え原発事故の影響も大きく受ける、いわき市の北側に位置する地区だ。

海岸近くの家はほぼ全てが津波の被害を受けており、今では基礎の部分だけが残っていた。そんな久之浜にある小学校の校庭の一角に、浜風商店街というプレハブによる仮設商店街があった。お店は駄菓子屋や、床屋、酒屋など十店ほどが

並び、お店の方たちがみんな明るかったのが大変印象的だった。

福島では新しい産業を生み出す動きも起きている。東日本大震災は甚大な被害をもたらした今はまだ復興の途中だが、これ乗り越えることはつまり人類の進化である。私たちは今その進化の最中にいる。震災後もあきらめず明るく前進する福島の人々の姿を見てそう感じた。



ペンリレー 徒然草

富樫 静子

大黒様の御歳夜



師走に入り寒さが身にしみる季節となりました。まだ積雪はありませんがここ数

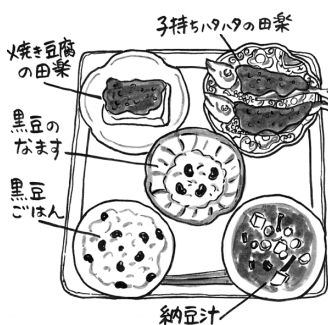
日間風が強く、みぞれ混じりの雨が降る悪天候が続いております。灰色一色の空です。

今日は大黒様にお供えするためのおこし作りをしました。材料は米入り、黒砂糖、水あめ、サラダ油、きなこで

大黒様に
まめに暮らして
子孫繁栄を願って
豆お供えします。



まっか大根
(二股大根)
をお供えします。



作ります。添加物なしの自然食品なので、こども達も大好きなお菓子です。12月9日は大黒様の御歳夜です。物の本によると大黒様が妻を

迎える夜とされているそうです。近くの産直施設に料理の材料を買いに行ってきた。店は賑わいでこの行事にちなんだ商品もたくさん並べられています。まっか大根(二股大根)も出ています。なくてはならないものです。大黒様を地域みんなで大切にしているのだと、とても暖かい気持ちになりました。

毎年大黒様にお供えするお膳は豆尽くしと決まっております。紹介しますと、まず黒豆を金槌でたたいてつぶして炊いた黒豆ごはん、焼き豆腐の田楽、今が旬の子持ちハタタの田楽、きれいな赤紫色に染まった黒豆なます、豆腐・蔵・ずいき芋のいもがしら・もだし(きのこ)が入った納豆汁の5品です。家族がみんなで暮らせますように、そして子孫繁栄を願って作ります。それにお神酒、まっか大根と柀におこしとそれぞれの財布を入れて(1年の収穫と収入を感謝する意味も込められている)お供えをし、家族みんなで拌み、料理を頂きます。

自分へのプレゼント?



先日知人の結婚式に行ってきた。自分が入社した頃の頃にバイトで働きにきた者同士で、新郎新婦共にプライベートでの交流もあり、感慨深いものがあった。

今の職場で、こういったパターンのカップルを彼らを合わせて3組程見ている。うちの職場に、もしかしたら縁結びの神様でも潜んでいるのでは?とも考えてみたのだが、10年も入ればこのようなカップルに2、3組会うのも確率の範囲であろう。いずれにしても、人との縁とは、何処でどうなるかわからないものである。

余談ではあるが、その結婚式当日、実は自分の誕生日でもあったのだが、お祝いのスピーチをすることになった。誕生日に人の結婚式を祝うことになろうとは思ひもなかった。まあ、めでたいのでそれを自分への誕生日プレゼントとしましょうか。

T君とYさん ご結婚おめでとございます。

(段)

大黒様の御歳夜が過ぎるといよいよ庄内も冬本番を迎えます。

ハウスのほうれん草の収穫、枝豆の種の選別、ボカシ肥料作りと仕事は続きますが、体を休め趣味を楽しめるのもこの時期です。

我が家に伝わる年中行事を絶やすことなく、神仏を敬う心と家族への想いを大切にしていきたいです。守り続けて行きたいと思っています。

あとがき



小学校4年生の息子が、先日柔道大会の試合中に足を怪我してしまった。初めての事に親もオロオロ。レントゲンを撮ってもらおうと幸い骨は折れておらず、重症の捻挫との事。松葉づえの使い方を習い、その日から片足生活が始まった。トイレに行くのも階段の昇り降りも大仕事。「足が使えないところんなに大変なんだ。」とため息をつく息子。「ああ、柔道もつとやりたいなあ。」練習が辛いとはかり言っていた彼がそんなセリフを言ったので驚いた。出来なくなつて初めて柔道をやることの幸せに気付いたようだ。「足は使えないから上半身の筋トレをやりたい!」とスポーツ魂に燃える息子を見て、これが文字通り怪我の功名というやつかと思つた。

自分とは言えば、真っ白い雪に覆われた畑を見て、春になったらやりたい仕事次々と浮かぶ。暑い夏には辛いとばかり思っていた農作業なのに、「できない時間」に結局自分は農作業が好きなのだといふ頃。(母)